

# 調査結果の概要

## 1 学校に対する好き嫌い (児童生徒1-1. 保護者1-1)

学校が好きかどうかについて、小学生・中学生・高校生はそれぞれ約7割、6割、5割が肯定的な回答(「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」。以下同じ)である。これは全国調査(国立教育政策研究所)の結果より若干低い。

それに対し、保護者は、それぞれ約9割、8割、7割が「子どもは学校が好きだ」と思っている。どの校種においても、子どもより約2割多くの保護者が「子どもは学校が好きだ」と思っている。

## 2 勉強に対する好き嫌い (児童生徒1-2. 保護者1-2)

勉強が好きかどうかについて、小学生・中学生・高校生はそれぞれ約5割、2割、1割が肯定的な回答である。中学生以上になると格段に下がる。これを全国調査(国立教育政策研究所)の結果と比較すると、小学生は約1割多く、中学生はほぼ同じである。

「子どもは勉強が好きだ」と思っている保護者は、それぞれ約5割、3割、3割であり、中学校・高等学校の保護者は子どもの実態以上に「子どもは勉強が好きだ」と思っている。

## 3 勉強の価値 (児童生徒1-3,4. 保護者1-3,4)

「勉強は大切だ」と思っている子どもは、小学生・中学生・高校生とも9割弱から7割強の間であり、大きな差はない。これは全国調査(国立教育政策研究所)とほぼ同じ結果である。また、校種にかかわらず、ほとんどの保護者は「勉強は大切だ」と思っている。

「勉強は受験(や就職)に関係なくても大切だ」と思っている子どもは、小学生・中学生・高校生でそれぞれ約8割、7割、6割である。また、中学生以上になると強い肯定(「そう思う」。以下同じ)が減る。これらは全国調査(国立教育政策研究所)とほぼ同じ結果である。中学生以上になると、高校入試・大学入試等の短期的な目標に対する意識がかなり強くなると思われる。

## 4 勉強と成績、受験・就職、職業、努力、有用性 (児童生徒1-5~9. 保護者1-5~9)

勉強すれば「よい成績をとれる」・「受験や就職に役立つ」・「好きな仕事につくことに役立つ」・「自分で答を見つけられるようになる」・「ふだんの生活や社会に出て役立つ」と思うかどうかについて、子どもの回答は、校種間の差はあるものの、全国調査(国立教育政策研究所)の結果と似た傾向を示した。

また、保護者の回答は、校種による差はほとんどなかった。

ただし、これらの中で、「勉強すれば私はよい成績をとれる」と「勉強すれば自分で答を見つけられるようになる」における肯定的な回答が、中学生以上でやや少なかった。中学校以上では、自信を失う子どもが増えていると思われる。

## 5 よい成績、受験・就職、職業、努力、有用性のために勉強 (児童生徒1-12~16)

「よい成績をとれるよう」・「受験や就職に役立つよう」・「好きな仕事につけるよう」・「自分の力で答を見つけられるよう」・「ふだんの生活や社会に出て役立つよう」勉強したいと思うかどうかについて、子どもの回答は、校種間の差はややあるものの、全国調査(国立教育政策研究所)の結果と似た傾向を示した。総体的に、本県の子どもたちは前向きに勉強しようとしていると言える。

ただし、これらの中で、「分からないことでも自分の力で答を見つけられるよう勉強したい」における肯定的な回答が、中学生以上でやや少なかった。

## 6 勉強と賞賛 (児童生徒1-10,11,17,18. 保護者3-11,12)

「勉強すればお父さんやお母さんなどがほめてくれる」と回答した子どもは、小学生・中学生・高校生でそれぞれ約6割、4割、4割であった。これは、小学生は全国調査(国立教育政策研究所)の結果を上回るが、中学生では下回っている。また、否定的な回答(「そう思わない」・「どちらかといえばそう思わない」。以下同じ)の中学生は約5割であり、全国調査(国立教育政策研究所)の結果より多い。

保護者の回答においても、中学校以上では、ほめる割合がかなり減っている。また、高等学校では、保護者はほめることもしかることも少ない。

「勉強すれば先生がほめてくれる」についても、小学生では全国調査(国立教育政策研究所)の結果を上回るが、中学生では下回る。

これらから、本県の小学生は家庭や学校において勉強のことでよくほめてもらうが、中学生以上はほめられることが少ないと言える。

また、「お父さんやお母さんなどにほめられるよう勉強したい」・「先生にほめられるよう勉強したい」における肯定的な回答も、小学生は全国調査(国立教育政策研究所)の結果を上回るが、中学生では下回る。

## 7 子どもの勉強への親の指示 (児童生徒2-4. 保護者3-7)

「子どもに勉強しなさいと言う」について、保護者は、小学校・中学校・高等学校でそれぞれ約8割、7割、6割が肯定的な回答である。

これに対し、「親は「勉強しなさい」と言いすぎる」について、小学生・中学生・高校生は、それぞれ約3割、3割、2割が肯定的な回答である。

これらは、ベネッセ教育研究所等の調査の結果とほぼ同じ傾向である。

## 8 勉強についての悩み・反省 (児童生徒2-1~3)

「前学年までにもっと勉強しておけばよかった」・「勉強の仕方がわからない」・「わかりやすい授業にしてほしい」などにおいて、小学校・中学校・高等学校と校種が上がるにつれて、全般的に肯定的な回答(「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」)が増えている。

## 9 授業の理解度 (児童生徒3-1. 保護者4-1. 学級担任2)

国立教育政策研究所「平成13年度教育課程実施状況調査」や文部科学省「学校教育に関する意識調査(2003)」と同様に、5段階尺度(よく分かる、だいたい分かる、分かることと分からないことが半分くらいずつある、分からないことが多い、ほとんど分からない)で行った。

「よく分かる」・「だいたい分かる」を合わせた回答は、小学生・中学生・高校生でそれぞれ約7割、5割、3割であった。これは、小学生・中学生ともに全国調査(国立教育政策研究所)の結果より若干高い。

また、これに「分かることと分からないことが半分くらいずつある」まで合わせると、それぞれ約95%、85%、80%である。

保護者の「子どもは、学校の授業がどの程度分かると思いますか」についての回答も、子どもとほぼ同様の結果であった。

学級担任の「ふだん行っている授業の内容を、児童生徒はどのくらい理解していると思いますか」についての回答では、「よく理解していると思う」・「だいたい理解していると思う」を合わせた回答で、小学校・中学校・高等学校のそれぞれで約8割、5割、4割であった。これは、小学校・中学校のどちらにおいても全国調査(文部科学省)の結果とほぼ同じであった。

## 10 分からないことの事後処置 (児童生徒3-7. 保護者3-10)

授業で分からないことがあったとき、「友だちにたずねる」という子どもが校種を問わず最も多い。次に、小学生では「家族にたずねる」、中学校以上では「自分で調べる」であった。これは全国調査(国立教育政策研究所)の結果でも同様である。

また、中学生以上で「先生にたずねる」が減るとともに、「そのままにしておく」が増えるようである。

## 11 平日の学習時間、土日と平日の学習時間の比較 (児童生徒3-2,3. 保護者4-2,3. 学級担任5)

小学生・中学生ともに約4割が「30分以上、1時間未満」で最も多い。次が、小学生は「30分未満」、中学生は「1時間以上、2時間未満」である。また、中学生以上では「ほとんどしていない」も多くなるなど、個人差が大きくなる。全国調査(国立教育政策研究所)の結果と比較すると、全体的に、本県の子どもたちの学習時間はやや少ないと言える。

土日と平日の学習時間の比較では、小学生は「ほとんど同じ」か「少し少ない」という回答が多いが、中学生は「ほとんど同じ」か「少し多い」という回答が多かった。高校生は、「かなり少ない」が4割以上である反面、「かなり多い」という回答も多くなるなど、小学生・中学生に比べて個人差が大きい。

学級担任は、小学校で「30分以上、1時間未満」か「30分未満」と指導する割合が高いが、中学校では「1時間以上、2時間未満」か「2時間以上、3時間未満」と指導する割合が高い。

## 12 学習塾・家庭教師・通信教育 (児童生徒3-4-1~5)

学習塾や家庭教師、通信教育などを行っている小学生は、算数が最も多く約3割であり、国語、社会、理科が約2割であった。内容は「学校の勉強より進んだ内容や難しい内容」が多かった。

中学生は、英語と数学が約3割で多く、国語、社会、理科が約2割であった。内容は「学校の勉強でよく分からなかった内容」が多かった。

全国調査(国立教育政策研究所)の結果と比較すると、小学生で学習塾や家庭教師、通信教育などを行っている割合はあまり大きな差はないが、中学生では低くなっている。

## 13 忘れ物への対策 (児童生徒3-5. 保護者4-4)

「子どもが学校に持っていく物を、前日かその日の朝に確かめるよう教えて」きたと答えた保護者は、小学校・中学校・高等学校ともに9割前後であった。

「前日かその日の朝に確かめる」と答えた子どもは、保護者の回答よりも約1割から2割程度少ないようである。また、「ほとんど確かめない」と答えた子どもも、小学生・中学生で約1割、高校生で約2割いた。

## 14 平日の読書時間 (児童生徒3-6. 保護者4-5)

平日に、学校の授業以外でどのくらい読書をしているかについては、個人差が大きい。しかし、ほとんど読書をしない(「全然しない」と「10分未満」の合計)子どもは、小学生・中学生・高校生でそれぞれ約5割、6割、7割もいる。これは、全国調査(国立教育政策研究所)でも同じような結果である。

また、保護者に対する同様の質問においても同じような回答が得られた。

## 15 子どもとの会話(友だち、先生、成績・勉強、受験・就職、将来・職業、一日のできごと) (保護者3-1~6)

「先生について」・「一日のできごと」などは、小学生・中学生・高校生と校種が上がるに

つれて親子の会話がやや減る傾向にある。それに対し、「受験や就職試験について」、「将来や職業について」などは、校種が上がるにつれて会話が増えるようである。

首都圏の調査（ベネッセ未来教育センター）の結果と比較すると、全般的に会話が少ないようである。

#### 16 子どもの宿題の手伝い（保護者3-8,9）

「子どもの学校の宿題を手伝う」保護者は、小学校で約3割であり、中学校以上では1割未満である。これは、首都圏の調査（ベネッセ未来教育センター）の結果と比べ、小学校で多く、中学校で少ない。また、「夏休みの宿題（読書感想文など）を手伝う」保護者も、ほぼ同様の傾向であった。

#### 17 教育方針（世間の流れ、塾・家庭教師・通信教育等）（保護者3-14,15）

「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしたいと思う」保護者は、小学校・中学校・高等学校でそれぞれ約7割、7割、6割であり、首都圏の調査（ベネッセ未来教育センター）の結果より全般に多い。これに対して、「子どもの将来を考えると、学習塾や家庭教師、通信教育などをしないと不安になる」保護者は、同調査の結果より少ない。

#### 18 子どもの学力・勉強についての方針（保護者2-1）

子どもの学力や勉強について、9つの事柄からあてはまるものをすべて選んでもらった。

小学校・中学校・高等学校すべてで、「これからの時代は資格を身に付けることが役に立つ」を選んだ保護者が最も多く、次が「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」であった。

小学校・中学校・高等学校と校種が上がるにつれて、「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」や「学校生活が楽しければ成績にはこだわらない」などを選んだ保護者が減り、「できるだけいい大学進学や就職ができるよう成績を上げてほしい」や「今は勉強することが一番大切だ」などを選んだ保護者が多かった。

首都圏の調査（ベネッセ未来教育センター）の結果と比べると、「これからの時代は資格を身に付けることが役に立つ」を選んだ保護者の多さが目立つ。

#### 19 子どもの最終学歴についての方針（保護者2-2）

小学校・中学校・高等学校のすべての保護者とも、「専門学校・各種学校まで」が3割強で最も多い。これと「高等学校まで」、「四年制大学まで」を合わせると、どの校種においても約9割を占める。

首都圏の調査（ベネッセ未来教育センター）の結果では、小学生と中学生の保護者両方で「四年制大学まで」が5割を占めており、本県のそれは少ないと言える。

#### 20 指導形態、指導方法等（学級担任1-1~10）

「少人数指導」、「チーム・ティーチング」、「コンピュータ活用授業」、「学校図書館活用授業」、「補充指導」、「宿題を出す」を行っているかについては、小学校の学級担任の肯定的回答（「そうである」、「どちらかといえばそうである」）の割合が高い。

また、「読書を習慣化させる取り組み」、「課題解決的学習」は、小学校・中学校の学級担任の肯定的回答の割合が高く、「習熟度別指導」は、小学校・高等学校の学級担任の肯定的回答の割合が高い。

「発展的課題を取り入れた授業」は、校種による差はほとんどなかった。

## 21 総合的な学習の時間の課題（学級担任3）

総合的な学習の時間を実施する上で問題となっていると思う点について、8つの事柄からあてはまるものをすべて選んでもらった。

小学校・中学校・高等学校に共通して、「学年全体を見通した発展性や系統性の構築」・「教員の打ち合わせ時間の確保」・「外部機関等との連携」を選んだ学級担任が多かった。中学校では、「教員の打ち合わせ時間の確保」が最も多かった。また、高等学校では、「外部機関等との連携」よりも「校内の指導体制の構築」が多かった。

全国調査（文部科学省）の結果では、小学校・中学校ともに「教員の打ち合わせ時間の確保」が最も多い。

## 22 習熟度別指導の課題（学級担任4）

習熟の程度に応じて集団を編成した指導を行うことについて、実施上の問題だと思っ点について、8つの事柄からあてはまるものをすべて選んでもらった。

小学校・中学校・高等学校に共通して、「児童生徒の実態に応じた教材等の開発と指導方法の工夫改善」を選んだ学級担任が最も多かった。次に多いのが、高等学校では「生徒の学習状況的確な把握」なのに対し、小学校・中学校では「教員間の打ち合わせ時間の確保」・「保護者への説明や理解」であった。

全国調査（文部科学省）の結果と比較すると、本県の小学校・中学校では、「保護者への説明や理解」をあげた学級担任が目立つ。

## 23 評価（学級担任6-1~7）

学級担任に対し、最近の児童生徒に対する「評価」を概観した上で、どの程度あてはまるかを尋ねた。

「自分の指導方法を振り返るようになった」・「日常的に細かく児童生徒の様子を観察するようになった」・「評価の客観性が高まった」と答えた学級担任が、小学校・中学校・高等学校すべてで多かった。「児童生徒の学習意欲を高める評価が可能になった」と答えた学級担任は、小学校・中学校・高等学校とも3~4割であった。「評価活動が複雑になった」と答えた学級担任は、小学校・中学校で非常に多かった。「より正確に児童生徒の学習の状態を家庭に伝えられるようになった」と答えた学級担任は、小学校・中学校・高等学校の順に高かった。

これらを全国調査（文部科学省）の結果と比較すると、小学校・中学校どちらにおいても本県の学級担任は肯定的な回答が全般に高く、新しい評価の考え方に対し前向きに取り組んでいると言える。

「学校の評価は入試選抜の現状にそぐわなくなった」では、校種による特徴が出ている。中学校で肯定的回答が多く、高等学校では否定的回答が多い。また、小学校では「分からない」という回答が多い。これは、全国調査（文部科学省）の結果とほぼ同様である。

## 24 家庭や地域社会に望むこと（学級担任7）

児童生徒に学びの習慣を身に付けさせるため、日頃、家庭や地域社会にしてもらいたいことについて、8つの事柄からあてはまるものをすべて選んでもらった。

小学校・中学校・高等学校すべてで、「早寝早起きなど生徒の生活を規則正しくする」・「学校が出した宿題や課題をはじめとする家庭学習に取り組むよう促す」・「読書に取り組ませる」・「多様な体験や学習の場、機会を提供する」が多かった。

校種による若干の違いはあるものの、全国調査（文部科学省）とほぼ同様の結果であった。